

機関番号：17701

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2007～2010

課題番号：19682003

研究課題名(和文) 島嶼地域における先史時代墓制の系譜

研究課題名(英文) The Origin of Prehistoric Burials on the Islands

研究代表者

新里 貴之 (SHINZATO TAKAYUKI)

鹿児島大学・埋蔵文化財調査室・助教

研究者番号：40325759

研究成果の概要(和文)：徳之島トマチン遺跡の発掘調査をもとに、南西諸島の先史時代葬墓制の精査・解明を行なった。その結果、サンゴ石灰岩を棺材として用い、仰臥伸展葬で埋葬し、同一墓坑内に重層的に埋葬することや、装身具や葬具にサンゴ礁環境で得られる貝製品を多用することが特徴と結論づけた。ただし、これは島という閉ざされた環境ではなく、遠隔地交易を通じた情報の流れに連動して、葬墓制情報がアレンジされつつ営まれていると理解される。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes prehistoric burial system in the Ryukyu Archipelago through archaeological research on tomachin site on the Tokunoshima Island. The study reveals that coffin are made of coral limestone, and supine position and multiple type structure are a main burial style, and multiuse accessories and funeral goods are obtained from coral reef environment. However, it is estimated that the burial system was not closed to environment, but it is arranged by synchronous information through long distance trade.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度			
2007年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
総計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：南西諸島、葬墓制、副葬品、装身具、形質人類学、ミトコンドリア DNA 分析、窒素・炭素安定同位体分析、動物考古学

## 1. 研究開始当初の背景

南西諸島の葬墓制研究は、第二次大戦前まで学術調査を主体として行なわれ、近世以降の特殊な「風葬」型式に焦点が当てられており、先史時代の葬墓制研究はほとんど行なわれていない。しかも、その大半は南西諸島の在地研究者ではなく、九州・本土の学者・研

究者を中心としていた。第二次大戦後になり、学術調査を中心に大隅諸島の重要遺跡が発掘されることとなり、その文化的系譜を読み解く研究へ移行した。1980年代以降、行政的な大規模開発に伴い奄美・沖縄諸島の重要遺跡が確認されてから、ようやく南西諸島先史時代葬墓制の研究が行なわれるようになって

たものの、それ以降ほとんど進展していなかった。また、行政的な発掘調査は行政的な地域区分も生み出し、双方で研究交流を行なう状況もほとんどなかったといえる。そのため、筆者はこれまでの研究状況を整理し、南西諸島を包括して葬墓制の研究を行なうことに着手した。また、文部科学省科学研究費若手研究(B)「初期国家形成期における島嶼地域社会と長距離交易形態変容のシステム論的研究」(直接経費 410 千円)を受けて、2004 年度より調査を継続してきた徳之島トマチン遺跡の発掘調査を行なうことによって、遺構把握の難しい砂丘遺跡の調査方法の確立、葬墓制の分析、自然科学分析の応用によって、葬墓制研究を進展させるために、本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

研究計画の柱は下記の 3 つになる。

### (1) 実施調査

- ① 地中レーダー探査
- ② 発掘調査(考古学的調査)

### (2) 整理作業・研究

- ① 発掘遺構・遺物の整理、研究
- ② 自然科学分析
- ③ 他地域との比較研究

### (3) 研究報告・一般化

- ① 学会・論文発表
- ② シンポジウム開催

これまでにほとんど研究の進んでいなかった南西諸島の先史時代葬墓制について、考古学的な発掘事例を整理し、また、特定遺跡を発掘調査し、考古学的手法と自然科学分野の応用から、葬墓制の系譜を紐解くことを目的とする。九州・本土との並行関係を基軸に土器編年を再構築し、葬墓制の明確な並行関係のもと、分析を行なう。南西諸島では砂丘立地の墓域が多いため、出土人骨の残存率は高いものの、人骨から得られる自然科学的手法を用いることが少なかったため、ミトコンドリア DNA による集団系譜や親族構造の解析、窒素・炭素安定同位体分析による主要食性の復元、人骨の放射性炭素年代による年代の決定も行なう。また、環境復元のために、花粉分析やウォーター・フローテーション分析も行なう。ただし、砂丘および亜熱帯地域という環境特性のため、花粉がほとんど残らないということも考えられるため、遺跡から出土する陸産貝類の分析も行ない、食性復元のために、海産貝類と脊椎動物遺体の分析が必要不可欠となる。

## 3. 研究の方法

(1) ①については、地中レーダー探査が砂丘遺跡においても有効性を発揮することを確認した。しかし、遺構の特定には発掘を行なう必要がある(一部畑地造成の際の掘り起こされた土壌塊にレーダーが反応した部分が

あった)、その相互調査によって砂丘地域における遺構認定の分析パターンを作る必要があると考えられた(平成 19 年度)。

②については、鹿児島県徳之島トマチン遺跡の発掘調査を行ない、これまでに確認されたことのない構造の石棺墓を研究することになり、無尽蔵に埋設された礫群の検出・取上げに、乾湿両用の掃除機を使った検出方法や写真測量など調査方法の確立も軌道にのせることができた。また、これまでに南西諸島で確認されていない平積みで構築された石棺、全国的に類例のない三段の重層構造をもつことなど、同遺跡の著しい特性を抽出することができた(平成 19・20 年度)。

(2) ①については、平成 19 年度より現在も継続中であり、平成 23 年度報告書作成前に終了する。

②については、遺物の石材分析、ウォーター・フローテーションによる植物遺体の抽出、動物遺体の同定、土器の胎土分析、人骨の埋葬法の復元、形質人類学的調査、分子(DNA)人類学による起源の問題、炭素・窒素安定同位体分析による食性の復元などを行っており(平成 19~21 年度)、平成 22 年度には、上記分析の不足分や、過去平成 4 年に鹿児島大学歯学部によって調査された石棺墓内から検出された人骨の放射性炭素年代測定、炭素・窒素安定同位体分析のほか、ガラス玉の分析、ヒスイの分析などを行なった。

③は日本・朝鮮半島・中国・台湾(平成 21 年度)の文献比較調査はほぼ終了したが、各分野の専門家に原稿をお願いすることで対応することにした。

(3) ①はこれまでも発掘調査成果などを各学会で逐次公表してきた(平成 19~22 年度)。②については、地元への社会的還元を目指すだけでなく、遺跡保護意識の啓発も企図するため、発掘調査を行なった地元である徳之島伊仙町で、考古学・自然科学分析を含めた総合的シンポジウムを開催した(平成 21 年度)。

## 4. 研究成果

(1) 発掘調査の成果：トマチン遺跡は、貝塚が下部に、墓域が上部に構築された砂丘遺跡である。主として縄文時代晩期から弥生時代前期まで営まれている。調査では墓域の調査を主体として行なった。

墓域は発掘調査中に地中レーダー探査も行なっており、砂丘においても石棺墓や土坑墓が確認されたことから、その有効性が確かめられた。

3~4 層にかけて多量の礫を使用する石棺墓 2 基と土坑墓 1 基が調査によって確認され、過去平成 4 年には、石棺墓 1 基が確認されている。このことから、石棺墓を主要な埋葬施設としていることが分かる。これらの墓は上部施設として緑色岩類と石灰岩から

なる礫群（覆石）と下部施設として、石灰岩を棺材とした石棺墓と素掘りの土坑墓としての構造が確認された。トマチン遺跡から得られた礫群は12000個余りで、1トンを超える量で出土した。地中レーダー探査で得られた墓域範囲の1/3程度しか調査されていないため、約3倍の量と重量が用いられているものと推定される。このように礫を多用する労働投下量をもつ墓制はこれまでに南西諸島では確認されていない。

石棺墓1は、60cm大のサンゴ石灰岩塊と30～40cm大の白色の扁平なサンゴ石灰岩を3～7段に平積みにして構築される。長側と片方の小口を平積みとし、もうひとつの小口には60cm大の扇形のテーブルサンゴを立てる。蓋石はないが木蓋であった可能性もある。石棺規模は内法が200×60cmであり、被葬者が伸展葬でちょうど1体分入る大きさとなっている。注目すべきは棺内構造と埋葬方法である。棺内は3段の重層構造となっていることであり、上・中・下段ともに棺を構築しているものと同様の扁平なサンゴ石灰岩を敷いて、屍床が形成されている。屍床である上段埋葬の底石は36個のサンゴ石灰岩を主体とした平石を敷き詰め（ヤコウガイ蓋・軽石が各1点含まれる）、約37kgを計る。また、内部で頭骨の再葬が行われている。

上段埋葬には、3体の被葬者が認められ、同一石棺内で長側・小口側に以前の被葬者の骨（2・3号人骨）を寄せながら埋葬されている。最終埋葬である1号人骨は、山側に頭位を向けた仰臥伸展葬で埋葬されている。また、この3体の被葬者以外に1体分の頭骨が再葬されており、1号人骨の左腰に安置されていた。屍床は隙間が多く比較的簡素な状況で敷かれている。上段埋葬における遺物は完形品のゴホウラ背面貝輪や貝小玉、ヒスイ玉などが出土しているが、1号人骨には伴っておらず、以前に埋葬された2・3号人骨、あるいはそのうちの1体に伴っていた可能性が高い。

中段埋葬は、上部施設で用いられている礫群が被葬者の上半身を覆っており、それを取り除き、砂をしばらく取り払うと被葬者があらわれた。上段埋葬と同様の頭位方向をもつ1体分の仰臥伸展葬（4号人骨）であり、石棺墓1内では、一定方向に頭位を意識していることが窺われた。また、この4号人骨は頭部が失われていた。胸元には抜け落ちた歯が散乱しており、十分に骨化してから頭部が抜き取られたことを示していた。照合の結果、4号人骨の胸元に落ちていた歯と、上段埋葬1号人骨の左腰部に安置してあった頭骨の歯槽骨が合致した。このことから、4号人骨が埋葬され、骨化してから頭骨を抜き取り、上段埋葬の屍床を構築した後、さらに3体の被葬者（1～3号人骨）を埋葬するまで大事

に棺内に安置され続けたことになる。また、中段の屍床は上段と異なり、かなり丁寧に隙間なく敷かれており、頭部が位置する箇所には、サンゴ石灰岩ではなく、緑色を呈するビーチロックを嵌め込み、視覚的にも枕石の効果を与えている。これらは水磨を受けたクモガイ、緑色岩類、緑色を呈するビーチロックを含む、サンゴ石灰岩主体の38個の平石・礫で構成され、重量は約63kgを計る。主要な遺物は貝小玉であり、シャコガイを用いたと考えられる棒状垂飾品も身体周辺から出土している。

下段埋葬は、二次的に移動された散乱骨（5号人骨）と礫群と貝製品が混在して検出され、原位置を保っているものはないと判断された。また、屍床は一部が残存しているものの、その大半は抜き取られていることが判明し、それらは中段埋葬の側壁・小口・屍床などに再利用されている可能性が考えられた。また、屍床の一部は墓坑底面と長側・小口に挟まれ、小口石の上に長側がのることから、墓坑→屍床→小口→長側の順序で石棺を構築していること、追葬（中段・上段）するに当たり、棺を上部に増築し、底石を敷いて重層構造をとることが判明した。下段埋葬の遺物は、貝小玉とともに、オオベッコウガサガイやカサガイに粗孔を穿った副葬品が10数枚得られ、上・中段とは異なる葬送の違いを思わせるとともに、沖縄諸島の副葬品の利用法に類似した状況がみいだされた。

石棺墓1で出土する遺物で最も多いのが、イモガイの螺塔部を用いた貝小玉類と、ヤコウガイの蓋を利用した螺蓋製敲打器である。完形品の背面貝輪は、かなり大型のゴホウラを利用した可能性がある。シャコガイを利用したと考えられる棒状垂飾品は、これまでに類例がほとんどない。そのほか、タカラガイ類の背面やゴホウラの体部、そして、オオベッコウガサガイなどの背面に粗孔を穿った製品などのほか、巻貝や二枚貝の印象化石も出土しており、これらは葬具としての利用も示唆される。化石利用は、これまで沖縄諸島のサメ歯製装身具でしか知られていなかった。注目すべきは丸玉と不定形のヒスイ製品の出土であり、新潟県糸魚川産である。

以上のように、トマチン遺跡の石棺墓1は、従来の南西諸島の墓制でも知られていない要素を多分に持っている。また、周辺地域である日本列島・台湾・中国大陸・朝鮮半島にも類例がほとんどないことが判明した。棺を平積みにして構築すること、三重構造をとること、上・中・下段で埋葬方法が異なること、頭骨を重要視した再葬の具体的な様相が明らかとなったことなど、墓制研究に益するところが大きい。また、遺物もこれまでに知られていなかったものが多く出土し、遠隔地交易を示す遺物も得られている。

一方、沖縄島で国指定史跡となっている木

綿原遺跡も、人頭大の覆石を上部施設とした石棺墓主体の埋葬遺跡であり、石灰岩塊を用いる石棺構造や二重構造となる埋葬方法、ゴホウラ貝輪未製品やヒスイ丸玉の出土など、トマチン遺跡に類似する要素が多分にある。このことから、トマチン遺跡が、縄文・弥生文化の及ぶ最南端の地である沖縄地域へ、葬墓制要素が及ぶことを跡づける貴重な遺跡と考えられる。

サンゴ石灰岩を棺材として用い、石棺墓における仰臥伸展葬、同一墓坑内に垂直に埋葬していく追葬、身体を装飾した貝製品、貝製品を葬具に多用することなど、南西諸島の葬墓制の文脈にありながら、石棺墓構造や埋葬法、遺物などに異質な要素を持つことは、徳之島という南西諸島の中央部に位置し、文化の交錯地点となる地理的な特性があらわれているとみなすことができるのである。

### (2) 検出人骨の分析

石棺墓1と土坑墓1より人骨は概ね6体分が得られているが、身長や体つきは南西諸島の先史時代人骨の形質学的知見とほぼ同様で、被葬者は島嶼地域の集団であると判断された。ただし、顔面がほとんど欠失していたので、どのような顔つきをしているかは不明であった。

ミトコンドリア DNA 分析では、石棺墓1上段埋葬の2号人骨と中段埋葬の4号人骨の2体分について行なわれた。ハプログループは2号人骨が D4n、4号が D4b とされ、日本人の約33%がもつ最も普遍的なグループであるが、このグループが縄文時代から島嶼地域にも存在した可能性が指摘された。

人骨6体における炭素・窒素安定同位体分析では、海生魚類に近く、C3植物も利用していた可能性が考えられた。このなかでも土坑墓1の6号人骨が最も魚類利用範囲に近く、石棺墓1の5体は植物利用範囲に近い。男女差は認められないが個体差があることが確認された。また、土層中の木炭片や土器からススなどの炭化物が得られていないため、放射性炭素年代測定を人骨6体分について行なわれた。約2500~2600年前ごろを中心としていることが判明した。日本列島でいえば、縄文時代晩期末(弥生時代早期)頃に相当し、筆者が行なってきた南西諸島の土器の並行関係に矛盾しない結果が得られた。

### (3) 遺物の分析

出土土器で明確に供献土器と思われるものは少ない。また、型式の判明する土器も少ないが、筆者がこれまでに行なってきた南西諸島の土器500余点と併せて、また、今回は岩石学的分析を加えてトマチン遺跡の土器の蛍光X線分析を行なった。結果、分析試料の大半は徳之島内産胎土を示し、遺跡の位置する臨海砂丘地帯でなく、内陸部の土壌を利用したことが判明した。岩石学的・化学的分析結果から明らかに土器胎土が異なると

される土器は、考古学的肉眼観察の結果とも合致した。

貝製品は、墓域・墓域外ともに小形イモガイ螺塔部を利用した貝小玉、ツタノハ科粗孔品、螺蓋製敲打器が出土量として最も多い。遺構内出土品としては、石棺墓1上段埋葬に螺蓋製敲打器・ヤコウガイ製品・ツタノハ科粗孔品・貝小玉・印象化石・ゴホウラ貝輪・ゴホウラ殻頂粗孔品・スイジガイ製利器が得られている。ゴホウラ背面貝輪は奄美・沖縄諸島において、単独墓坑内より出土した例はこれまでになく、南西諸島の集団が葬墓制にゴホウラ貝輪を用いていた可能性が高くなったことは重要である。中段埋葬では、螺蓋製敲打器・ツタノハ科粗孔品・貝小玉・イモガイ科螺塔部粗孔品・オオシマボタル粗孔品・タカラガイ科背面除去品・印象化石・シャコガイ棒状垂飾品が得られている。シャコガイ棒状垂飾品はこれまでに南西諸島で類例は得られていない。下段埋葬は中段埋葬時に荒らされているため、確実に伴うものかどうか難しい側面もあるが、螺蓋製敲打器・ツタノハ科粗孔品多量、二枚貝有孔品・貝小玉・イモガイ科螺塔部粗孔品・タカラガイ科背面除去品などが得られている。注目されるのは、ツタノハ科粗孔品が多量に得られたことである。

骨製品には過去平成4年調査の石棺墓で人骨に伴ってナイフ状製品が得られており、沖縄諸島に類例がある。その他骨針状製品、椎骨製品(装身具?)が少量得られている。

石器はヒスイ製品、磨石・敲打石、石斧転用品(敲打石)、剥片、ビーチロック円盤、砥石などが少量確認されているが、墓坑内に供献されたものはほとんどなく、墓域においては上部施設に転用されている。特に使用頻度が高いと思われる磨石・敲打石のうち、3点について付着デンプンの精査を行なったが、デンプン粒は検出されなかった。

脊椎動物遺体の分析では、サンゴ礁周辺魚骨を主体にイノシシが出土しており、資源利用の状況が示された。魚種サイズからは網・釣・刺突漁の多様な漁法が想定されている。また、量的には少ないものの外海沖合の種も得られていることから、ある程度の活動領域の広がりが見込まれ、これは沖永良部島の同時期の遺跡と共通した要素であるとされた。

貝類遺体の分析では、陸産貝類からは墓域周辺が開けた景観環境が想定され、人為的な墓域の管理も想定されている。これは墓の上部構造である礫で覆われた墓の状況からは、首肯される状況である。食料貝種からは、オキニシ優占である珍しいタイプの遺跡であり、同時期の沖縄・奄美諸島の遺跡とも異なる組成であることが示された。

また、本遺跡の特徴として、多量のカニ・ヤドカリ類が確認されているが、墓域では少ない傾向にあった。通常、非食用種であるカ

ルイシガニも利用された一方で、南西諸島に一般的な種類が確認されていないことも示されている。

遺跡の環境復元を行なうため、土壌のウォーター・フローテーション分析や花粉分析を行なったが、砂丘という性格のためか、良好な結果は得られなかった。

石棺墓 1 上段埋葬および過去平成 4 年の調査で出土したヒスイ玉類は、分析結果、新潟県糸魚川産のヒスイ輝石であることが判明した。本遺跡で最も遠隔地との交易を示す重要な遺物である。

また、石棺墓 2（内部は未調査）の蓋石上部から出土したガラス玉の分析は、遺跡の年代とも関わる重要な分析であったが、分析結果はカリウム鉛ガラスであり、北宋時代に中国で初めて生産されたとされるもので、日本、南西諸島にはそれ以降、流通するものと考えられる。このため、このガラス玉は遺跡の年代と異なった後世の遺物が、根成孔隙などで古い時代の遺構まで下降したものと捉えられる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 26 件）

- ① 新里貴之、鹿児島県徳之島トマチン遺跡、考古学研究、57-4、査読有、122-124、2011
- ② 新里貴之、南西諸島における先史時代の墓制(Ⅲ)：沖縄諸島、地域政策科学研究、8、71-90、査読有、2011
- ③ 新里貴之、南西諸島における先史時代の墓制(Ⅱ)：トカラ列島・奄美諸島、地域政策科学研究、7、査読有、71-90、2010
- ④ 新里貴之、中部琉球圏先史時代の社会の変遷、考古学ジャーナル、No. 597、査読無、9-11、2010
- ⑤ 新里貴之、沖永良部島のゴホウラ貝輪未製品資料、南の縄文・地域文化論考、中、査読無、91-104、2009
- ⑥ 新里貴之、貝塚時代後期前半（弥生時代～古墳時代）の交易と社会、季刊沖縄、36、査読無、33-39、2009
- ⑦ 新里貴之、無土器期に並行する大隅諸島から沖縄諸島の交易・社会、石垣市史考古ビジュアル版、3、査読無、73-75、2009
- ⑧ SHINZATO, T., NAGANO, Y., YOSHIDOME, M., TAKENAKA, M., Archaeological Viewpoint of the Tomachin Site, Tokunoshima Island, Kagoshima, Anthropological Science, Vol. 116 No. 3, 査読無、272, 2008
- ⑨ 新里貴之（ほか 15 名）、奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島土器の蛍光 X 線分析による胎土分析：縄文時代後・晩期を中心に、廣友会誌、4、査読無、1-16 頁、2008

- ⑩ 新里貴之、喜念・佐弁砂丘遺跡群トマチン遺跡の発掘調査：島嶼部の石棺墓、日本考古学協会第 74 回総会研究発表要旨、査読無、48-49、2008
- ⑪ 新里貴之、南西諸島徳之島トマチン遺跡出土のヒスイ玉、玉文化、5、査読無、76-86、2008
- ⑫ 新里貴之、喜念・佐弁砂丘遺跡群トマチン遺跡発掘調査概要報告：トマチン遺跡第 1 次～3 次調査概要、人類史研究、14、査読有、13-28、2008

〔学会発表〕（計 22 件）

- ① 新里貴之、洞穴発見の縄文時代人骨、公開講座：南日本先史時代の生活、2010 年 9 月 11 日、鹿児島
- ② 新里貴之、徳之島トマチン遺跡の石棺墓、第 37 回文化講座：どこまでが琉球かどこまでが日本か、2010 年 2 月 6 日、沖縄
- ③ 新里貴之、暫定編年前期末～後期初頭における奄美・沖縄の土器、平成 21 年度第 2 回琉球環境文化史研究会、2010 年 1 月 30-31 日、沖縄
- ④ 新里貴之、トマチン遺跡の墓、徳之島トマチン遺跡シンポジウム：墓からみえる徳之島原始の生活、2009 年 11 月 21 日、鹿児島
- ⑤ 新里貴之、徳之島トマチン遺跡：第 1～5 次調査の概要、第 2 回鹿児島考古談話会、2009 年 7 月 25 日、鹿児島
- ⑥ 新里貴之（ほか 6 名）、南西諸島の先史土器、日本文化財科学会第 26 回大会、2009 年 7 月 11～12 日、愛知
- ⑦ 新里貴之、近年の奄美諸島地域の墓制・葬制その他、2008 年度廣友会、2008 年 12 月 6 日、沖縄
- ⑧ 竹中正巳、新里貴之（ほか 2 名）、鹿児島県徳之島トマチン遺跡出土人骨、第 62 回日本人類学会大会、2008 年 11 月 1～2 日、愛知
- ⑨ 新里貴之、竹中正巳（ほか 2 名）、鹿児島県徳之島トマチン遺跡の考古学的見地、第 62 回日本人類学会、2008 年 11 月 1～2 日、愛知
- ⑩ 新里貴之、徳之島伊仙町トマチン遺跡の調査成果：第 1～4 次調査、平成 20 年度鹿児島県考古学会、2008 年 7 月 20 日、鹿児島
- ⑪ 新里貴之（ほか 9 名）、胎土分析からみた南西諸島先史時代土器の地域性（奄美諸島）、日本文化財科学会第 25 回大会、2008 年 6 月 14～15 日、鹿児島
- ⑫ 新里貴之（ほか 7 名）、胎土分析からみた南西諸島先史時代土器の地域性（沖縄諸島・先島諸島）、日本文化財科学会第 25 回大会、2008 年 6 月 14～15 日、鹿児島
- ⑬ 新里貴之、喜念・佐弁砂丘遺跡群トマチン遺跡の発掘調査：島嶼部の石棺墓、日

本考古学協会第74回総会、2008年5月24～25日、神奈川

- ①4 新里貴之、考古資料から見た先史時代における奄美地域の特色、徳之島カムイヤキ陶器窯跡国指定史跡登録記念シンポジウム、2007年10月13日、鹿児島

[図書] (計6件)

- ① 新里貴之、他、琉球列島における埋葬遺跡の文化的景観、先史・原史時代の琉球列島：ヒトと景観、六一書房、243-266、2011  
② 新里貴之、他、南西諸島の縄文集落の葬墓制、シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ：葬墓制、雄山閣、337-36、2010  
③ 新里貴之、他、貝塚後期文化と弥生文化、弥生文化の輪郭：弥生時代の考古学、1、同成社、148-164、2009  
④ 新里貴之、他、琉球縄文土器後期、総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、822-829、2008

[その他]

第30回沖縄研究奨励賞受賞 2009年1月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

新里 貴之 (SHINZATO Takayuki)  
鹿児島大学・埋蔵文化財調査室・助教  
研究者番号：40325759

### (2) 連携研究者

中村 直子 (NAKMURA Naoko)  
鹿児島大学・埋蔵文化財調査室・准教授  
研究者番号：00227919  
竹中 正巳 (TAKAENAKA Masami)  
鹿児島女子短期大学・生活科学科・教授  
研究者番号：70264439  
高宮 広土 (TAKAMIYA Hiroto)  
札幌大学・文化学部・教授  
研究者番号：40258752  
篠田 謙一 (SHINODA Ken-ichi)  
国立科学博物館・人類研究部・グループ長  
研究者番号：30131923  
米田 穰 (YONEDA Minoru)  
東京大学大学院・新領域創成科学研究科・准教授  
研究者番号：30280712  
黒住 耐二 (KUROZUMI Taiji)  
千葉県立中央博物館・動物学研究所・上席研究員  
研究者番号：80250140

### (3) 研究協力者

樋泉 岳二 (早稲田大学)  
宮島 宏 (フォッサマグナミュージアム)  
田村 朋美・庄田 慎矢 (奈良文化財研究所)

加藤 久佳 (千葉県立中央博物館)  
藤木 利之 (国際日本文化研究センター)  
角南 聡一郎 (元興寺文化財研究所)  
榎林 啓介 (総合地球環境学研究所)  
竹森 友子 (奈良女子大学)  
小畑 弘己 (熊本大学)  
中村 友昭 (熊本大学修士)  
山野 ケン陽次郎 (熊本大学博士)  
新田 栄治・寒川朋枝 (鹿児島大学)  
大屋 匡史 (鹿児島大学修士)  
三辻 利一・大西 智和・鐘ヶ江 賢二・上村 俊雄 (鹿児島国際大学)  
堂込 秀人 (鹿児島県教育委員会)  
新東 晃一・池畑 耕一・横手 浩二郎・西園 勝彦 (鹿児島県立埋蔵文化財センター)  
中山 清美 (奄美博物館)  
町 健次郎・鼎 丈太郎 (瀬戸内町教育委員会)  
榊原 えりこ (龍郷町教育委員会)  
四本 延弘・伊藤 勝徳・新里 亮人 (伊仙町教育委員会)  
内山 五織 (伊仙町在住)  
元田 順子 (犬田布小学校教諭)  
具志堅 亮 (天城町教育委員会)  
相美 伊久雄 (志布志市教育委員会)  
鎌田 浩平 (新和技术コンサルタント)  
上原 静 (沖縄国際大学)  
三澤 佑太・折田 智美 (沖縄国際大学学生)  
土肥 直美・池田 榮史・後藤 雅彦 (琉球大学)  
宮城 光平 (琉球大学修士)  
岸本 義彦・片桐 千亜紀・山本 正昭・徳嶺 理江・宮城 明恵・小橋川 剛・福原 りお・名嘉 政修 (沖縄県立埋蔵文化財センター)  
中村 愿 (北谷町教育委員会)  
西銘 章 (嘉手納高等学校教諭)  
島袋 綾野 (石垣市市史編纂室)  
安座間 充 (金武町教育委員会)  
宮城 弘樹・黒沢 健明 (今帰仁村教育委員会)  
登 真知子 (糸満市教育委員会)  
宮城 幸也 (うるま市教育委員会)  
藤田 祐樹・山崎 真治 (沖縄県立博物館・美術館)